

壺屋古窯群窯跡分布調査報告

吉田 健太

那覇市壺屋に所在する壺屋古窯群は琉球王国以来、県内における陶器生産の中心地であり、現在に至るまで継承されている。しかしながら、その歴史についてはいまだ不明確な点が多く、考古学的な検討も十分とは言えない状態が続いている。とりわけ壺屋古窯群における窯跡分布調査は、基礎研究であるが故か、しっかりとした体裁で実施されておらず、周知されていないのが現状であった。そのため本稿では、これまで継続的に実施してきた窯跡分布調査の詳細をとりまとめ、将来的な追加指定を想定した場合や今後急速に進むであろう開発にむけて対策を行うための基礎データの構築に努めることとした。

1. 壺屋焼について

壺屋地区の地形は、標高約 17 m を頂点に小高い丘陵で形成しており、明治初年頃には周辺に湿地帯が広がっていたようである。周辺の土壌には陶土として優れている粘質の淡黄褐色土が展開している。その丘陵斜面地を上手く利用して、近世～近代に属する陶器焼成の窯が数多く立地していた事が聞き取り調査などで確認されている。那覇市壺屋の沿革は、琉球王府の正史である『球陽』によると、1682（尚貞十四）年に知花（沖縄市美里）、宝口（那覇市首里鳥堀周辺）、湧田（那覇市泉崎周辺）等にあった壺窯を真和志間切牧志邑の南、現在の壺屋地区に移転統合したことに始まると伝える（移設陶窯于牧志邑地 昔有壺屋在美里郡知花邑首里寶口那覇湧田等地共計三所至于是年其三地陶窯移在牧志邑南以爲一所也（球陽 卷七））。その後、「中山伝信録」では「壺家山」、乾隆二年帳には真和志間切の新設の村として「壺屋村」の記載が確認される。三カ所の陶窯が統合された理由は明らかではないが、壺屋が首里に近接し、官窯として王府の直接支配が可能であったこと、原料となる陶土および薪などの材料の確保・運搬・製品の積み出し（泊港）などが用意であったことなどが考えられる。特に陶土については、真和志間切の識名台地および壺屋周辺は荒焼に適した黒土・赤土が取れたという。また戦前壺屋には十数基もの登窯があり、陶工達は半農半陶の生活を送っていたと言われている。また集落の中には3つの村クムイ（池）と5つのカー（井戸・井泉）があり、水には不自由することはなかったという。以降壺屋は琉球国内において陶器製造の一大生産地となり、多種多様な陶器が製作されてきた。戦後、市街地の拡大で人口が増加するに伴い 1970 年代初め頃から窯の煙による煙害問題が起り、72 年には壺屋の登窯は閉鎖され、現在ではガス・灯油・電気を使った窯等へと変わっていったが、現在でも新垣家所有の東ヌ窯の他、荒焼用の南ヌ窯、前ヌ内窯がその姿を残し、移転統合から 300 年以上たった今なお壺屋では 14 の窯元が作陶を続け壺屋焼の伝統を守り続けている。現在、壺屋

よしだ・けんた（那覇市市民文化財文化財課開発調整グループ所属 主任学芸員）

では 1973 年には壺屋の荒焼のぼり窯附石牆（＝南ヌ窯）が県指定有形文化財（建造物）、1985 年に金城次郎氏が国の重要無形文化財「琉球陶器」技能保持者（人間国宝）、2001 年には壺屋焼が那覇市無形文化財（工芸技術）、2002 年に新垣家住宅が国指定有形文化財（建造物）に指定されている。

壺屋古窯群における考古学的な調査は、1988 年に那覇市教育委員会の埋蔵担当職員が壺屋一帯の文化財パトロールを実施中、工事現場の更地より大量の陶器片や窯跡を発見したことに端を発する。前述のように球陽にも壺屋での窯業が王府時代より行われている記載があることから、明治～昭和初期の壺屋の民俗地図などより、那覇市壺屋一帯を「壺屋古窯群」として周知の遺跡として確認している。1988 年より那覇市教育委員会によって、壺屋古窯群の範囲において、地域ごとに埋蔵文化財発掘調査・試掘調査が継続的に実施されている。

近世時期の主な出土遺物として県内に広く知られている壺屋焼であるが、その歴史においては明確でない点が多い。特に壺屋焼の技術系譜や製品の変遷などについては文献記録を中心とした検討が進められているものの、実際の資料によって裏付けることに研究者間の共通認識が形成されているとは言い難い。これは従来の研究が文献記録を拠り所にしつつ、窯跡やそこで焼成されたと考えられる製品についての評価をいわゆる好事家的な視点で進めた結果、検証する手続きがなかなか進められなかったことに起因している。現在沖縄産陶器の研究が進められ、県内窯跡資料の検討や壺屋古窯群における窯構造の検討が実施されている。しかしながら壺屋古窯群における窯跡分布調査は、基礎研究であるが故か、しっかりとした体裁で実施されておらず、周知されていない状態であった。

そのため本稿では、これまで継続的に実施してきた窯跡分布調査の詳細を取りまとめる。1988 年に確認された「壺屋古窯群」の範囲内に、明治～昭和初期の壺屋の民俗地図（大城・小橋川 1972）や専門職員の現場踏査情報などから、施釉陶器窯・無釉陶器窯・陶質土器窯、瓦窯の想定箇所を記入した（図 1）。また、これまで発掘調査を実施して窯跡が確認された箇所を併せて記載した。以下、種類ごとに記載する。

2. 施釉陶器（上焼）窯

施釉陶器（上焼）は成形した生地土に白化粧土を掛け、その上から彫刻や彩色によって上絵付けを施すものである。上焼に用いられる陶土は、沖縄本島中部以北から採取される赤土（喜瀬武原粘土）と白土（白化粧土）を用いる。白土は素地土に混ぜられたり、器の表面を白く化粧するための化粧土に使われる。各工房では、いくつかある粘土をそれぞれの好みで混ぜ合わせて素地土をつくるが、作られる製品によってその配分は変えられる。焼き上げる温度は約 1200 度とされ、ガス窯や電気窯などが普及する以前まで連房式登窯で焼成していた。碗や鉢、急須などの日常雑器から抱瓶（ダチビン）、カラカラなどの酒器や花瓶など様々な製品が製作されている。以降、番号順に年代と現状を記していく。

①は仲本窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は所在確認されていないものの昭和 10 年

以降に確認される。現在は小橋川製陶所仁王窯が所在している。家屋奥は緩やかな傾斜は維持されるものの、南側は住宅造成の際に削平されている可能性が高い。

②は東ヌ窯が現在も所在している。明治 38 年頃、昭和 10 年以降ともに確認される。全長 23m、幅約 4m で最上部にある排煙口を除く窯全体が赤瓦屋根で覆われている。現在は国指定有形文化財（建造物）「新垣家住宅」を構成する登窯として保存されている。

③には栄徳窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は所在確認されていないものの昭和 10 年以降に確認される。現在は壺屋陶器会館が立地している。現在はやちむん通り沿線であえることから整備されており、宅地造成に伴い平坦地となっている。

④⑤には前ノ内窯が所在していたとされる。④は明治 38 年頃、昭和 10 年以降ともに確認され、現在でも窯体が確認でき、形状は連房式登窯である。戦後は窯を短縮して焼成をおこなっていたとされ、窯体の長さは短い。⑤は明治 38 年ごろには確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は住宅が建設されていることから、傾斜地を削平して平坦地を形成してしたものと考えられる。

⑥には前大工小窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は宅地が造成されている。周辺は南側へと傾斜する地形であり、当該地が削平しているか盛土をしているか不明である。

⑦には缸根窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は宅地が造成されており、平坦地となっている。周辺も平坦地であり、壺屋集落の中心部に近い箇所である。

⑧は窯名不明である。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在周辺は国際通りから神里原通りへと抜ける道路が整備されている。当該地は斜面地を切って道路際の平坦地を形成しているものと考えられる。

3. 無釉陶器（荒焼）窯

無釉陶器（荒焼）は生地土を成形後、無釉あるいは泥釉などを薄く掛けた状態で焼き締めるもので、器表面には土の荒々しさが残る。用いられる陶土は、沖縄本島中南部から採取される黒土（クルンチャ）と赤土（アカンチャ）を用いる。黒土はクチャと呼ばれる島尻粘土と、ジャーガルと呼ばれるクチャが風化した土を指す。また赤土は琉球石灰岩が風化してできた島尻マージを指す。陶土は黒土 7 割に赤土 3 割の割合で混ぜて使用するが、製品によってその配分を変えている。焼き上げる温度は約 1120 度とされ、ガス窯や電気窯などが普及する以前まで筒窯を用いて焼成をおこなっていた。製作していた製品は水甕、味噌甕・酒甕などの貯蔵を目的とした大型製品から、升瓶などの小型の製品まで製作していた。以降、番号順に年代と現状を記していく。

⑨には当間窯が所在していたとされる。⑩には上ノ下窯が所在していたとされる。⑪は窯名不明である。⑨⑩⑪ともに明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は大規模な平坦地を形成し駐車場が設けられている。当該地は東ヌ窯北側の裏地に

位置しており、北側へと傾斜する地形を削平して現在の平坦地を形成したものと考えられる。

⑫には東リノ島窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。やちむん通りから少し入った箇所であり、現在は平坦地を形成し駐車場となっている。かなり古い時期に住宅造成のために平坦地を形成したものと考えられる。

⑬には新屋窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在、当該地には住宅が建てられている。⑬は北側へ傾斜する地形となっている。

⑭には下田窯が所在していたとされる。明治 38 年頃、昭和 10 年以降ともに確認される。現在は住宅が建てられている。新垣家住宅の西隣に位置しており、南側へと傾斜する地形も現在も垣間見える。

⑮には上与儀小窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は住宅が建てられている。現状では西側へと下る傾斜地であり往時の地形を残している可能性が想定される。

⑯は新屋平田窯が所在していたとされる。明治 38 年頃、昭和 10 年以降ともに確認される。現在は北側へ下る傾斜地に住宅が建てられている。

⑰⑱は窯名不明である。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は北側へ下る傾斜地上にベタ基礎の住宅が建てられている。急傾斜地であり往時の地形を残している可能性が高い。

⑲には豆腐屋窯が所在していたとされる。明治 38 年頃、昭和 10 年以降ともに確認される。

㉑には後の屋窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は空き地となり周囲にはフェンスが設けられている。地形は南西に下る傾斜であり、窯の残存が考えられる。

㉒には儀間窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は北西に緩やかに下る傾斜地であり、住宅が建てられている。

㉓㉔は新屋敷小窯が所在していたとされる。現在は北側へ下る傾斜地であるが、個人住宅・集合住宅が建てられておりその際に宅地造成のため削平されたと考えられる。㉓は明治 38 年頃には確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。㉔は明治 38 年頃、昭和 10 年以降ともに確認される。

㉕は渡ヶ次窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は道路拡張に伴い工事がすすめられて駐車場となっており、往時の地形は留めていないと考えられる。

㉖には下松尾窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。天ぷら坂と桜坂をのぼりきった箇所に位置しており、北西に下る傾斜地となっている。現在は集合住宅が建てられている。

㉗㉘は那覇市立壺屋焼物博物館および陶器センターが建てられている箇所である。建築に伴って切土して平坦地を形成しているが、当初は南東に下がる傾斜地であった。㉗には上豆腐屋小窯

が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。⑳には西ヌ窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。なお㉔の西ヌ窯においては那覇市文化財課において発掘調査が実施されている。

㉑㉒㉓㉔は現在「南ヌ窯」が所在する箇所一帯である。南西方向へと傾斜する地形を有する。㉑には新屋敷小窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。㉒には南風窯が所在していたとされる。明治 38 年頃、昭和 10 年以降ともに確認される。窯は現存しており、「壺屋の荒焼のぼり窯附石牆」として県指定有形文化財（建造物）として指定されている。窯の長さは約 20m、幅約 8m である。傾斜地を利用してカマボコ型の形状の窯は内部には間仕切りはなく、一本の筒型となっている。㉓には下豆腐屋小窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は所在確認されていないものの昭和 10 年以降に確認される。㉔には門小窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。

㉕㉖は「すーじ小」沿いに位置しており、南側へ傾斜する傾斜地となっている。㉕には缸根窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。㉖には久志窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。

㉗には前ノ西窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は北側へ下る緩やかな傾斜地となっており、平屋の商店が建てられている。

㉘には上豆腐屋小窯が所在していたとされる。明治 38 年頃は確認されるものの、昭和 10 年以降は確認することができない。現在は東へ下る傾斜地となっており、坂頂上部は更地となっている。

4. 陶質土器（アカムヌー）窯

アカムヌーは壺屋焼の一種で、「火の匂い（ヒーヌカバグー）」をさせるぐらいの温度（約 600 度）で焼き上げたものを指す。陶土には荒焼の陶土であるジャーガルと島尻マージにニービを混ぜたものを使用していた。焼成には荒焼窯を小さくした窯やフースー窯と呼ばれた小型の窯が使われていた。作られた製品は、ヤカンやサークーと呼ばれる土鍋、火炉（ヒールー＝炉のようなものと暖める火鉢がある）、七輪や花鉢が確認される。以降、番号順に年代と現状を記していく。なお古地図などで確認できる窯はいずれも明治～大正期にかけては確認されるものの、大正末～昭和初年に地図では確認することができない。また窯名も不明である。

㉙は新垣家住宅西側に位置しており、南へ下る傾斜地となっている。現在は駐車場となっている。

㉚はやちむん通り沿いに所在しており、現在は店舗が立地している。平坦地となっており、往

時の地形は不明である。

③⑨は現在、個人住宅及び集合住宅が建てられて入り組んだ状態である。往時の地形は留めていないものと考えられるが、周辺地形から察するに南へ下る傾斜地上にある。

④⑩は十字路角に所在する。現在は住宅が建てられており、土地の状況は確認することができない。

④⑪は十字路角に位置する箇所である。北東へと急傾斜するであり、住宅造成に伴い小規模ながら削平されている。

④⑫は壺屋地域でも標高が高い位置に位置すると考えられる。現在は住宅が建てられており、平坦面である。

④⑬は④⑫の裏地に位置する。南へと緩やかと傾斜する箇所である。

④⑭は壺屋焼物博物館裏手の箇所である。北西に向けて下る傾斜地である。現在は集合住宅が建てられている。

④⑮は南側へ下りきった箇所に所在する。現在は古い平屋住宅が立地することから、旧地形は残している可能性は高いと考えられる。

④⑯はやちむん通りから少し入った箇所に所在し、壺屋古窯群際に位置する。現在は平坦地であり、平屋住宅および駐車場となっている。旧地形は不明である。

④⑰はやちむん通りから少し入った箇所に所在し、壺屋古窯群際に位置する。現在は平坦地であり、個人住宅が所在する。

5. 瓦窯

壺屋では瓦づくりもおこなっていたとされる。瓦窯は傾斜地に作られた筒状の窯であり、構造は荒焼窯と変わりなかったようである。窯焚きは約 300 度のあぶり焼きを 3 ～ 4 日行つてのち、本焼（約 900 度）を約 20 時間行つていた。あぶり焼・本焼はそれぞれ専任の職人が担当していたようである。以降、番号順に年代と現状を記していく。なお古地図などで確認できる瓦窯はいずれも明治～大正期にかけては確認されるものの、大正末～昭和初年に地図では確認することができない。また窯名も不明である。

④⑱は壺屋地域でも標高が高い位置に位置すると考えられる。現在は集合住宅が建てられており、平坦面である。

④⑲は北東部に緩やかに下る傾斜地に位置する。現在は個人住宅が建てられている。

④⑳は北西に緩やかに下る傾斜地に所在する。現在は個人住宅が立地する。以前の住宅建築の際、切土して平坦面をつくったものと考えられる。

④㉑は北西へと下る傾斜地に位置する。現在は集合住宅が建てられていることから、破壊されているものと考えられる。

④㉒は個人住宅が複雑に入り組んだ箇所に位置する。平坦面であるが周囲の状況も含め不明点が多い。

⑤③は壺屋古窯群際に位置しており、現在は平屋店舗が設けられている。戦後の道路拡張などに伴い大規模な工事がなされた箇所であり、窯の残存は厳しいものと考えられる。

6. 発掘調査で確認された窯

壺屋古窯群における考古学的な調査は、1988年に那覇市教育委員会の埋蔵担当職員が壺屋一帯の文化財パトロールを実施中、工事現場の更地より大量の陶器片や窯跡を発見したことに端を発する。前述のように球陽にも壺屋での窯業が王府時代より行われている記載があることから、那覇市壺屋一帯を「壺屋古窯群」として周知の埋蔵文化財包蔵地として確認している。1988年より那覇市教育委員会（平成25年度より那覇市市民文化部文化財課）によって、壺屋古窯群の範囲において、地域ごとに埋蔵文化財発掘調査・試掘調査が継続的に実施されており、発掘調査において14基の窯が確認されている。

⑤④ 1988～1989年度発掘調査（T-105地点）窯名不明

本窯は、地山層を掘り込み構築された洋梨状を呈する単室登窯である。焚口が南側に開口しており、炭化物が半円状に検出された。壁面はわずかに奥～右壁にかけて検出され、やや内側に弧状に立ち上がる状況を呈している。床面は厚さ1.5cmあり、その下層より別の床面が観察されたことより、本窯は少なくとも2枚の床面を有すると想定される。前面に石灰がみられ、焼成部の奥壁より焚口に向かって僅かに傾斜を成している。その中央部にはブロック状の焼台跡（72×22cm）が2基確認された。規模・形状から上焼（施釉陶器）で二度焼する際に用いる窯と想定され、赤絵窯の機能を有していた窯と考えられる。

⑤⑤ 1988～1989年度発掘調査（T-105地点）窯名不明

本窯は（54）窯の東側に隣接して検出されている。窯体の保存状態は極めて悪く、主軸に対して斜めに半截された状態で熱成部と焼成部の一部が確認された。全体の平面形は焚口がすばまるラケット状を呈する有段の登窯である。主軸は東西方向を示し、焚口は東側に開口する。壁面は僅かに熱成部でみられ、弧状に立ち上がる形状を有している。窯体内の熱成部と焼成部の境には約50cmの段差が設けられている。通炎口等の施設については確認できなかった。熱成部の床面は平坦で濃紺に焼成されており、僅かに石灰面が確認された。焼成部は傾斜角が22度を呈しており、石灰面の床面が検出された。焚口部には炭跡が検出されている。以降の重複関係などから、⑤④⑤⑥より古い時期のものと想定される。

⑤⑥ 1988～1989年度発掘調査（T-105地点）窯名不明

全体の平面形は焚口部が裾広がりのラッパ状に開く単室登窯である。傾斜地の地山層を30cmほど掘り込んで作られており、傾斜角度は10度、焚口はほぼ南側に開口する。窯体の天井・焚口部・煙出し部については後世の造成のため破壊されているが、壁面および床面の保存状態は良好である。床面は3枚確認されていることから、少なくとも3回以上の改築がなされたことが確認さ

れている。床面はいずれも石灰質である。床面は上層になるにつれて徐々に縮小している。出土遺物から荒焼（無釉陶器）の窯で 19 世紀後半ごろまで操業していたと考えられる。

⑤7 1994 年度発掘調査（W-105 地点）上豆腐屋小窯

現地地表下約 30cm において検出された窯である。焚口部は削平されており、窯尻側についても調査区対象外であったため窯の全長は不明である。残存部において床面および窯壁への立ち上がり際の部分を比較的良好に残しており、窯体幅は約 3.4m、窯の主軸は南東部へと傾斜している。床面は間層を挟み 3 枚確認されている。各床面締まった石灰面であり、他の窯と同様にかさ上げしながら形成していったと想定される。床面の傾斜角度は 5～9 度となっている。床面中央部より円柱状の柱に基部が確認されている。窯体造成当初からの遺構であり、分焰柱もしくは上部天井を支える基部である可能性が示唆される。戦前の地図によれば上豆腐屋小窯（ウィートーフヤークァーガマ）という昭和 10 年以前まで操業していた荒焼窯としての記載が確認されている。

⑤8 1994 年度発掘調査（T-106 地点）窯名不明

全体にやや洋梨状の形を呈する平窯である。床面は灰色を呈している。窯体周辺には帯状に焼土が確認された。また窯体内部中央では、灰色の床面が剥離した痕跡が検出され、焼台が設置された跡と想定される。

⑤9 1995 年度発掘調査（S-104 地点）ニシヌカマ

遺跡のほぼ中央の標高約 10.4 m～11.2 m において検出された。長さは⑥1や後世の攪乱によって破壊されていることから判然としない。幅約 1.8m を測る。焼成部の傾斜角度約 10 度、燃焼部の傾斜度は約 1 度の半地下式の登窯である。燃焼部（焚口）はほぼ西側に開口する。窯の床下面には排水溝（暗渠）とみられる遺構が左右両側と中央の三本設けられており、燃焼部下方で 1 本に合流する。出土遺物は壺、播鉢などの荒焼（無釉陶器）が主体である。切り取り保存をおこない、現在壺屋焼物博物館に展示されている。三基の切り合い関係などから⑤9→⑥0→⑥1の変遷が想定される。

⑥0 1995 年度発掘調査（S-104 地点）ニシヌカマ

⑤9の東側の標高約 11.4m において検出された。窯体の保存状態は極めて悪く、東側半分が破壊されていた。全体の平面形は楕円形を呈する平窯と想定される。出土遺物は少量ではあるが、荒焼（無釉陶器）と上焼（施釉陶器）が混在している。三基の切り合い関係などから⑤9→⑥0→⑥1の変遷が想定される。

⑥1 1995 年度発掘調査（S-104 地点）ニシヌカマ

遺跡東側の標高約 12.6m において検出された。長さは後世の攪乱が著しく判然としない。窯幅約 3.0m を測る登窯である。窯壁および床面の作り直しがみられ、石灰質の床面が 17 枚かさ

上げされていることが確認されている。また全体的な床面の改修は2～3回と想定される。出土遺物は荒焼（無釉陶器）、上焼（施釉陶器）、アカムン（陶質土器）が混在している。三基の切り合い関係などから⑤⑨→⑥⑩→⑥⑪の変遷が想定される。

⑥② 1999 年度発掘調査（S-105 地点）コウユウ窯

窯体の保存状態が良好で、全体の形状が知り得る窯である。平面形は略長方形で、窯幅約 2.5 mを測る。傾斜角度は約 16 度で、ほぼ西側へ開口する単室登窯である。焚口は四カ所確認され、床面は石灰質である。壁はレンガ状（約 40 × 10cm）のものをを用いて構築された窯であり、出入口は窯に向かって左側に三カ所確認された。また床面には窯天井を支える為の柱跡が 3 カ所確認された。この柱跡は桶形の窯道具を用いたもので煙出し部付近では遺構は確認されなかったが、柱の抜き跡らしきもの 2 カ所が確認された。その他に窯内からは天井に用いられた焼土塊や窯壁の破片などが大量に確認された。聞き取り調査より、当窯は 1950 年代まで操業していた「コウユウ窯」であることが確認されている。また切り合い関係から⑥③→⑥②の変遷が想定される。

⑥③ 1999 年度発掘調査（S-105 地点）コウユウ窯

⑥②によって破壊され、僅かに⑥②窯の燃焼部から焚口にかけて壁面が確認されている。⑥②窯と同様にレンガ造りの単室登窯と想定される。また切り合い関係から⑥③→⑥②の変遷が想定される。

⑥④ 1999 年度発掘調査（S-105 地点）コウユウ窯

⑥②窯の下層に位置し、僅かに石灰質の床面と北西側の壁が確認されている。その他の箇所に関しては破損が著しく、不明である。⑥②窯と比較して主軸が北にずれる様相がみられる。

⑥⑤ 1999 年度発掘調査（S-105 地点）コウユウ窯

焚口と煙出し部などでは確認できなかったが、平面形は略長方形で窯幅約 1.9m を測る。傾斜角度は約 18 度であり、西側へ開口する単室登窯である。煙出し部は削平されているが、4 枚の床面が検出・確認されている。地山層を掘削して構築されており、地山層直上からは 18 世紀代の無頸蔵骨器の出土が確認されている。

⑥⑥ 1999 年度発掘調査（S-105 地点）コウユウ窯

灰褐色と赤褐色の壁に囲まれる形で、海砂が約 12cm の厚さで三角状に堆積している。砂自体は焼かれた跡がないことから、焼成前の砂床と推定される。砂床面より灰釉碗が検出されている。

⑥⑦ 1999 年度発掘調査（S-105 地点）コウユウ窯

北西側に床面と壁面のみ確認されているが、小範囲のため詳細は不明である。

7. 小結・今後の課題

本稿では壺屋地区における陶器生産に関する考古学的な基礎研究の一端である窯跡分布状況の提示を中心に据え、古地図等の記録およびこれまでの発掘調査成果を基に壺屋古窯群における窯の分布を確認した。今回の調査では古地図等から 53 基、発掘調査成果から 14 基の分布を確認できている。また踏査において窯上部構造もふくめ残存しているのは 4 基、上部構造は厳しいものの床面などの残存の可能性があるものは、十数基は存在するものと推測される。

前述したように、壺屋地区は終戦直後における那覇の復興とともに開発がすすんだ地域である。その際に不幸にも幾つかの窯跡が未調査のまま破壊されていると推測される。那覇市において文化財専門職員が不在であったこともあるが、その数は数基にはとどまらないということは想像に難くない。現在、那覇市内においての開発調整件数は、想定以上の急増を示しており、その中には壺屋地区も含まれる。そのため本報告では継続的に実施してきた窯跡分布調査の詳細をとりまとめ、将来的な追加指定を想定した場合や今後急速に進むであろう開発にむけて対策を行うための基礎データの蓄積に努めた。生産地である壺屋における窯業生産の様相解明は待ったなしの状態である。

《参考文献》

- 池田榮史 1995 「琉球近世窯業史考 ―窯構造の検討―」『琉大アジア研究』創刊号 琉球大学法文学部附属アジア研究施設
- 池田榮史 2018 「沖縄における窯業史研究の到達点と課題 ―窯業開始期を中心に―」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第 19 号 那覇市立壺屋焼物博物館
- 大城精徳・小橋川秀義 1972 『壺屋の村 (1)』「琉球の文化 特集・沖縄の焼物」創刊号
- 大橋康二 2000 「Ⅰ 九州陶磁概論」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』
- 沖縄考古学会 2016 『(琉球陶器誕生 400 年記念) 16 ～ 17 世紀の沖縄における窯業の展開とその背景』沖縄考古学会 2016 年度研究発表会資料集
- 倉成多郎 2014 『壺屋焼入門』ボーダー新書
- 島弘・仲宗根啓 2004 「壺屋古窯群における「単室登窯」の変遷」『壺屋焼物博物館紀要』第 5 号 那覇市立壺屋焼物博物館
- 田畑直彦 2017 「近世における壺・甕の製作技術 ―九州・沖縄を中心に―」『中近世陶磁器の考古学』第六巻 雄山閣
- 那覇市教育委員会 1992 『壺屋古窯群Ⅰ』那覇市文化財調査報告書第 23 集 那覇市教育委員会
- 那覇市教育委員会 1995 『壺屋古窯群Ⅱ』那覇市文化財調査報告書第 27 集 那覇市教育委員会
- 那覇市教育委員会 1996 「壺屋ニシメ窯発掘調査現地説明会資料」
- 那覇市教育委員会 1997 『壺屋古窯群Ⅲ』那覇市文化財調査報告書第 38 集 那覇市教育委員会
- 那覇市教育委員会 2007 『那覇市の文化財 平成 18 年度』那覇市教育委員会
- 那覇市教育委員会 2008 『壺屋古窯群Ⅳ』那覇市文化財調査報告書第 77 集 那覇市教育委員会
- 那覇市市史編纂室 1979 『那覇市史』「資料篇 那覇市の民俗」第 2 巻中の 7 那覇市市史編纂室
- 那覇市文化財課 2015 『壺屋古窯群Ⅴ』那覇市文化財調査報告書第 101 集 那覇市教育委員会
- 那覇市立壺屋焼物博物館 2011 『琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館×那覇市立壺屋焼物博物館合同企画展図録
- 文化財建造物保存技術協会 2016 『重要文化財新垣家住宅主屋ほか 6 棟保存修理工事報告書』
- 吉田健太 2018 「壺屋古窯群における発掘調査成果と製品」『琉球王国の近世陶磁器流通』第 8 回近世陶磁研究会資料 近世陶磁研究会



壺屋古窯群・窯跡分布図